



アリとキリギリス



糖尿病、高血圧、動脈硬化、
あなたを襲う生活習慣病の恐怖

朝倉 哲也

アリとキリギリス

みなさん、「アリとキリギリス」の童話をご存知ですか？

夏の間、働き続けたアリと遊びほうけていたキリギリスの話です。

冬になってキリギリスは食べ物に困り、アリを頼りますが、

- ・アリに救われる
- ・相手にされず凍死する
- ・皮肉を言われる

など、いくつかの結末が知られています。

ですが、今日はもうひとつのお話しをお聞かせしましょう。

これまでの、どの結末より恐ろしい、アリとキリギリスのお話しです。

生来働くことが嫌いで、遊ぶことばかり考えていたキリギリスは、その年の初夏、株で大もうけをしました。有頂天になったキリギリスは大勢のとりまきを連れて、毎晩のように夜の街で豪遊をくりかえすようになっていきました。酒に酔うと、決まって「俺は株の天才だ。一生かかっても使い切れないくらいの金をかせぐのだ。」と豪語します。

金の力でいくつかの会社を買収し、オーナーとして君臨していましたが、その中の1社にアリが経営する会社がありました。キリギリスのやり方に反発したアリは、「もっと人材を育て、まともな商材をあつかうべきだ」とキリギリスに意見をしたため、その逆鱗に触れ、会社を追われるようにして去ることになります。

「アンタのようなお人よしでしみつたれたヤツは経営者として不適格だ。陳腐化してる。」と、罵声をあびせるキリギリスに、「あなたは可哀相な方だ。自分が孤立した存在であることに気づいていない。憐れだ。いつか気が付くときがくるだろう。」アリはそう切り返します。しかし、キリギリスは敗者の負け惜しみとしか受け取りません。

キリギリスは皮肉たっぷりに、左手を差し出し、「あいにく右手を負傷していてね。まあ、あなたはあなたの器にあった幸せをさがせばいい。ささやかな幸せってヤツをね。それじゃあ、グッドラック！」アリはキリギリスの冷たい左手を思い切り握り返しました。アリは生まれて初めて、誰かを憎いと思ったのでした。

アリとキリギリス-2

やがて夏も終わりに近づいたある日、とあるIT企業の粉飾決算に端を発した株の大暴落が起こり、市場は大混乱に陥ります。この事件でキリギリスの保有するほとんどの株は紙切れ同然となり、経営していた会社も相次いで破綻、個人の財産も差し押さえられてキリギリスは途方にくれます。

金の切れ目が縁の切れ目とばかり、取り巻きたちはクモの子を散らすようにキリギリスのもとから逃げて行きます。夜毎、金にもものを云わせて美女達をはべらせていたキリギリスには、愛してくれる女性もありません。彼はついにひとりぼっちになってしまったのでした。「くそ。あいつら、あれほど可愛がってやったのに、恩知らずめ。」と毒づきますが後のまつりです。

お金はもうほとんどありませんが、身についた贅沢癖は抜けきらず、高級な食事を続けていたため、周囲からはあきれられ、白い目で見られていました。そして、ついに貯えもは底をつき、一文無しになってしまいました。

家さえも失ったキリギリスは、秋風に追い立てられるように南へと向かいます。あてもなくさまよいつつ、とある街の外れにたどり着いたとき、ふと傍らに建つ古ぼけた家の窓から部屋の中が見えました。小さく、質素な作りではありますが、窓から垣間見える部屋はととても暖かく、ほんのりと幸福の色に染まっているかのようでした。

暖かな部屋の中で小さな娘と楽しげに遊んでいるのは、キリギリスに会社を追われたあのアリでした。キリギリスは思わず息をのみ、気が付くと窓に顔がくっつきそうなほど近づいていました。

「あいつだったのか……。それにしても、ヤツの云うとおりにってしまったな。くやしいが、仕方がない。」そうつぶやくと、キリギリスはアリの家の一晩泊めてもらおうとドアに向かいました。そのとき、何かヘンな感じがして右足が道路の継ぎ目にひっかかり、転びそうになりました。悪態をつきながらドアの前まで来ると、薄っぺらい木のドアをノックしようと右腕を上げます……。が、右腕はからだの脇にだらんと垂れ下がったままです。

「え？なんだ？」そう思ったとき、激しいめまいと頭痛が襲ってきました。足に力が入らず、そのまま地べたに倒れこむとキリギリスは激しく嘔吐を始めました。

「苦しい。だれか、たすけて。」そう叫んだつもりでしたが、舌がもつれてうまくしゃべれません。「られか。はすへれ。」（え？え？なんなんだ、これは？）そう思ったとたん意識は遠のき、キリギリスは深く暗い闇の中へと吸い込まれていったのでした。

アリとキリギリス-3

倒れこんだキリギリスを見て、どんどん野次馬が集まってきます。外の気配に気づいたアリがドアを開けると、そこにはあのキリギリスが白目をむいて倒れていました。開けっ放しの口からはよだれが流れ、失禁しています。

「おお、神よ。」信心深いアリはそうつぶやくと急いで部屋に戻り、受話器をとりあげ、救急の番号をダイヤルしました。電話の向こうにいるオペレーターに落ち着いて状況と場所を告げると、アリはゆっくりと受話器を置きました。

「これは、天罰なのだろうか。確かに私はキリギリスを憎んでいた。しかし、このようなことは望んでいない。」アリは、重く嘆息をもらしながら、長い時間思いを巡らせていましたが、ようやく自分を説得することに成功しました。「私は神の意志により彼を救う。彼がこうなったのは・・・私とは関係のないことだ。」

病院に運ばれたキリギリスの病状は大変重く、高血圧と動脈硬化から起こった脳梗塞に加え、糖尿病による合併症も引き起していました。それでも、救命医療チームによる懸命の治療により、キリギリスは何とか一命を取り留めることができたのです。

そして...

彼は闇の中にじっとしていましたが、彼の携帯電話がお気に入りのメロディで着信を知らせると、すかさず通話ボタンを押します。電話の向こうで株価の上昇を知らせる証券会社の営業マンが何事か大声で叫んでいる。「全部売りだ。」そう指示すると、ゆったりとしたイタリア製のソファに身体を沈め、タバコに火をつけ、深く吸い込む。そのとたん、燃えるような熱さを左足に感じ、キリギリスは我に帰ります。

(どこだ？ここは・・・) まだ意識が朦朧として目がさめません。

(ベッドの上だな。病院？そうか、病院だ。でも、なんで俺が病院に？)

左腕に刺さった点滴の注射針を感じて病院であることを悟りましたが、事の次第はわからないままでした。少しの間、考えていましたが、すぐに考えることが面倒になり、キリギリスは再び眠りに落ちていきました。

高級レストランで食事をしたとき、「君のしなやかで美しい白い指に似合うよ。」そう云って数百万円もする指輪をプレゼントしたモデルが、ベッドの傍でささやきかけます。「キリギリスさん、無事に終わりましたよ。良かったですね。」

(終わった？何が？良かった？)

アリとキリギリス-4

男の声が続けます。

「聞こえますか？キリギリスさん。さきほど、左足の切断手術を終えました。糖尿病の合併症で壊死していたので止むを得ませんでした。ところで、これが見えますか？」

「これってなんだ？ばかなこというな。目に何かマスクのようなものをかけているんだろう？見えるわけがないじゃないか！」

そう云ったつもりでしたが、舌がもつれて発する言葉は意味をなしません。キリギリスの目は大きく見開かれてはいましたが、視神経は糖尿病の合併症のために機能していないようです。

「だめなようですね。」ペンライトをポケットにしまいながら医師が言いました。「キリギリスさん。良く聞いてください。落胆させるようなことは申し上げたくありませんが、あなたは糖尿病の合併症で左足と両目の視力を失いました。」

「それから、路上で倒れた原因は脳梗塞です。病変部はなんとか治療しましたが、右半身と言語中枢に障害が出ています。これから、リハビリの方法を考えなければなりません、状況は非常にきびしいと思われます。まあ、ゆっくりやっていきましょう。」

「はんれ、あ、うう、えんら・・・」

キリギリスは取り乱して何か叫んだつもりでしたが、言葉にはならず、うめき声もれただけでした。

突然、嵐に襲われたような気がして、キリギリスの精神は平衡を失いました。あれほどぜいたくに慣れ親しんだ自慢の舌は、美味を味わうこともなく、もつれてうまく動かすことすらできない。目は見えず、口もきけず、1本だけ残された足は麻痺して動かない。体の中で動かせるのは唯一、左腕だけ。

（まるで、さなぎだ。さなぎは蝶になる日を待つが、俺は何を待てばいいんだ？元に戻る日は来ないっていうのに！）

あまりの出来事に彼の意識は次第に混濁し、現実と夢の間をさまようようになりましたが、意識がある間は"死にたい"と思うようになりました。でも、医師や看護師など周囲にその思いを伝える術はありません。

暗闇に閉じ込められた彼の日常で唯一のなぐさめは、身体を拭いてもらうとき、担当の看護師がやさしく左手を握ってくれることだけです。

あるとき、やわらかく温かいその手のひらに"しにたい"と左手の指で書いてみましたが、彼女はに

っこりと微笑んで（たぶんそうだと思う）「そんなことを考えてはだめ。きっと救いはあります。」そう云ってやさしく手を握ってくれました。

アリとキリギリス-5

キリギリスは生まれて初めて涙を流しました。こんな身になって、初めて優しさがどれほど尊いものかを思い知らされたのです。

（神様。私は放蕩の限りを尽くし、他者の心を踏みにじるような傲慢な振る舞いを繰り返してきました。）

（しかし、今、私は悔い改めます。できれば、ひどい仕打ちをしてしまった、ひとりひとりにあやまりたい。）

（そして、私をあなたのそばにどうかお召してください。ああ、神様。）

彼の願いは神様に届いたのでしょうか。

それからほどなく、彼の担当医は驚くべき発見をします。なんと大腸にピンポン玉ほどもあろうかという巨大な腫瘍があらわれたのです。

「まったく突然だ。唐突過ぎる。つい先日までなかったのに・・・」医師はわが目を疑い、頭をかかえました。

失明し、右半身が麻痺、左足を切断された患者にどんな治療ができるというのか。医師は悩んだ末、抗がん剤の投与を決断します。患者は体力も気力も落ちている。抗がん剤の副作用に耐えられないかもしれない。

（しかし、私は医者だ。病気を治すのが使命なのだ。）

そう自分に言い聞かせ、気持ちを奮い立たせなければ到底できない仕事でした。

患者にはがんであることが告知されないまま、抗がん剤の投与が始まりました。そうして治療を始めてすぐに、キリギリスは強烈な副作用に襲われます。

万力で頭を少しずつ締め付けられていくような激痛。吐いても吐いてもこみ上げてくる嘔吐感。もとより固形物は摂っていないので、粘液のようなすす黒い液体がキリギリスの口から溢れ出します。

（おおお・・・なんだこれは？ああ、気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い。頭がとれそう。目の上あたりから頭が・・・引っ張られる・・・ううう・・・頭の、頭のとっぺんが裂ける！）

全身の毛穴が開き、冷たい汗がねっとりとしみ出てくる。体中いたるところをキリで刺し抜かれているようなすどい痛み。関節は捻じ曲げられ、引っ張られ、骨は数センチ間隔でポキポキと折られていく。

アリとキリギリス-6

目に指を突っ込まれ、内臓はわしづかみにされ、腸をぐるぐるにねじられている。

(もう、もうやめてくれ。かんべんしてくれ。殺してくれ。頼む。死なせてくれ！)

闇の中でもがきながら、24時間の拷問に耐え続けるキリギリス。

限界は近づいていました。

しかし、抗がん剤の投与を開始したとたん、あらわれたときと同じ唐突さで、腫瘍は小さくなっていきました。目が見えず、物言えぬ患者は苦しみを訴えることもできず、医師は判断を誤らせます。信じられない速度で消えていく腫瘍。医師はその習性から治療をやめることはできませんでした。それどころか、投与間隔をせばめたのです。

「このぶんなら、あと2～3日で完全に消失する。早く消えれば、それだけ患者の負担は少なくなるはず……。」

あまりの痛み、苦しみに悶絶し、混濁する意識の中でキリギリスは自問します。

(なぜ、なぜ俺は生きている？こんなに、こんなにも苦しいのに、これほどの痛みを耐えながら！)

(ああ、これは天罰なのか？それとも……)

それとも。

自分自身が招いた災禍にすぎないのか。いずれにせよ、もう限界だ。

(神様。たすけてください。あなたにすがりたい。どうか、私を……)

そして、抗がん剤の投与から2週間、クリスマスを目前にした12月23日の夜。腫瘍が消えるのと同時に、キリギリスの命は果てたのでした。

最後に、身体の中で唯一動かせる左手を、
高々と、何かをつかむかのように差し上げて……

果たして。

彼の祈りは神に通じたのでしょうか。

アリとキリギリス-7

クリスマスの夜。

あのアリは、暖かい暖炉の前で家族に囲まれ、楽しげにクリスマスを祝っていました。

アリはキリギリスが死んだことなど知るよしもありません。あの日、彼は救急車を呼び、キリギリスを救いました。少なくとも、彼自身はそう思っています。

そして、彼はそのことを神に感謝しています。

「神さま。私はキリギリスを救うことができ、あなたに感謝しています。本当です。いつわりなんかじゃありません……。」

「私は、いつでもあなたの思し召しのまま生きているのです。」

善意にあふれたアリは、小さな家で愛する家族とクリスマスを祝います。

本当に、幸福そうに。

アリとキリギリス-8

さて。

あなたは今、疲労を感じていませんか？

眼が疲れていませんか？

タバコを吸いすぎていませんか？

睡眠は十分ですか？

お酒を飲みすぎていませんか？

運動不足ではありませんか？

肉類を好んで食べていませんか？

野菜や穀類、海藻などが不足していませんか？

太りすぎてはいませんか？

そして、ストレスを感じていませんか？

もし、今あなたの体調が思わしくないなら、
あなたの不調の原因はどこにあるのでしょうか。

あなたの周囲の環境ですか？

未知の病原菌ですか？

遺伝によるものですか？

それとも、避けがたい運命ですか？

いいえ、あなたの不調はあなたの生活に原因があるのです。
あなた自身の責任なのです。

そして、いつか病気になったとき、
あなたと、あなた以外の健康に気を配ってきた人たちが
国に納めたお金によって治療を受けるのです。

そして、その病気は、あなたを看病してくれる、
あなたの愛する、あなたの家族の生活の質をも
著しく低下させてしまうでしょう。

自分の身体は自分のものであるとともに、

社会に生き、社会を構成するとても大事な
存在であることを忘れてはいけません。

あなたがいなければこの社会は存在せず、
この社会がなければ、あなたもまた存在し得ないのです。

その大切な自分の身体を、どうか、
思いやり、いたわってあげてください。
あなたと、あなたの愛する家族と、
あなたを必要とする多くの人たちのために。

アリとキリギリス

<http://p.booklog.jp/book/76084>

著者：朝倉哲也

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/asakura888/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/76084>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/76084>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ